



## 特殊教育における後期中等教育の現状と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 後藤, 守, 小笠原, 詠子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00003540">https://doi.org/10.32150/00003540</a>

# 特殊教育における後期中等教育の現状と課題

後藤 守・小笠原 詠子

## I. 問題の所在

本論文は、前報「精神遅滞児における特殊学級卒業後の動向(I)」(後藤, 小笠原 1983)に続くものである。

北海道内の特殊教育諸学校および小・中学校特殊学級児童・生徒数は、かなりの数にのぼっており、たとえば特殊教育諸学校の場合、昭和30年度ではわずか1,250名であったのが、昭和52年度には2,615名と実に2倍以上にも達している。小・中学校特殊学級の場合も同様の傾向にある。これらの傾向は、昭和54年4月の養護学校への就学義務化に伴い、さらに増加の一途をたどっており、昭和62年度現在においては特殊教育諸学校数55校、4,765名の児童・生徒数に達している(北海道の特殊教育—特殊教育百年北海道記念会版 1978, 北海道の特殊教育 1982, 1987年度版)。このような状況の中で、特殊学級および養護学校の卒業生の動向をさぐるということは、これまでの特殊教育の成果を検討し、これからの特殊教育の方向を策定するための資料として大きな意味をもつと考える。さらにまた、この種の資料は、現在、特殊学級および養護学校に通学する子どもをもつ父母が子どもの将来を考える上でも興味深いものとなろう。

前回の調査は、北海道教育大学附属札幌小中学校特殊学級(以下、F学級という)の卒業生の進路状況を把握することを目的としたものであった。そこでは、9つの進路型のカテゴリーを設定し、それを通して進路状況の特徴を浮きぼりにしようと努めている。本調査においても前回の調査の進め方を踏襲している。表1は、前回の調査と比較して進路類型別による対象数の変化を示したものである。ここで特徴的なことは、③の「高等養護学校→施設入所」の進路型の対象者が増加していることである。56年度調査の時には、全体の7.4%であったのに対して、62年度では21.7%にも達している。このことは、施設に入所する場合、以前は中学部卒業後すぐに入所しているのが一般的であったのが、現在は高等部に進学してからの入所が多くなってきていることを示していると思われる。また、就職の場合も同様の傾向にあり、ここ6年間に中学部卒業後すぐに就職している事例は無く、すべて②の「高等養護学校→就職」の進路型で占められている。表1の資料からも明らかのように、特殊学級卒業生の卒業後の進路において後期中等教育としての役割を担う高等養護学校もしくは高等部は、障害児教育の最近の動向の中で重要な位置を占めてきているといえよう。そこで本研究では、特殊学級卒業生にとって、後期中等教育としての高等養護学校もしくは高等部がどのような意味をもっているかを、現状を浮きぼりにする中で、明らかにしていきたい。また、それらの資料を通して、特殊教育におけるこれからの後期中等教育のあり方についても考察を深めていきたい。

表1. 調査対象の内訳 ( )内は%

進路型	調査年度	
	56年度調査	62年度調査
①高等養護学校在学	13 (19.1)	17 (16.0)
②高等養護学校→就職	16 (23.5)	25 (23.6)
③高等養護学校→施設入所	5 (7.4)	23 (21.7)
④職業訓練校→自宅	4 (5.9)	2 (1.9)
⑤職業訓練校→就職	4 (5.9)	4 (3.8)
⑥職業訓練校→施設入所	0	2 (1.9)
⑦就 職	4 (5.9)	3 (2.8)
⑧施 設 入 所	19 (27.9)	24 (22.6)
⑨自 宅	3 (4.4)	6 (5.7)
合 計	68 (100.0)	106 (100.0)

## II. 方 法

### 1. 調査対象

62年度調査（以下、本調査という）では、昭和44年4月から昭和62年3月の18年間に、F学級中学部を卒業した者108名が調査対象とされている。ただし、調査の実施段階では、住所不明1名と死亡1名を除き、計106名を対象とする。調査対象の内訳は表1として、すでに問題の所在のところで提示されている。

### 2. 調査期日

昭和62年12月16日から昭和62年12月24日の期間が、調査資料の収集にあてられた。

### 3. 調査方法および分析方法

本調査は、質問紙による郵送調査により実施された。記入は、父母にしてもらった。資料は全て進路型を単位に集計をし、資料の比較分析が可能な項目に関しては前回の調査（56年度調査）結果とあわせて分析が進められた。

### III. 結果と考察

表2は、106名の対象者のうちの回答者数を進路型別にまとめたものである。分析対象となるのは、本調査の回答者62名であるが、主体となるのは高等養護学校経験者である(1)(2)(3)の進路型の回答者計41名である。

回答資料は3つの視点から分析され考察が加えられている。回答資料のうち、1つ選択という指定に対して2つ以上選択して回答したものがある。その場合は、 $1 \div (\text{○印の数})$ というように計算し、重みを調整している。したがって、表中の度数の部分小数のかたちになっている。

表2. 回答状況の内訳 ( )内は%

進路型	調査年度	
	56年度調査	62年度調査
①高等養護学校在学	11 (84.6)	11 (64.7)
②高等養護学校→就職	12 (75.0)	15 (60.0)
③高等養護学校→施設入所	3 (60.0)	15 (65.2)
④職業訓練校→自宅	0	2 (100.0)
⑤職業訓練校→就職	2 (50.0)	2 (50.0)
⑥職業訓練校→施設入所	0	0
⑦就 職	2 (50.0)	1 (33.3)
⑧施設入所	13 (68.4)	12 (50.0)
⑨自 宅	0	4 (66.7)
合 計	43 (63.2)	62 (58.5)

以下、前述の3つの視点、すなわち(1)高等養護学校への進学の際緯、(2)これからの高等養護学校への期待、(3)子どもの将来についての順に考察を進めていきたい。

#### 1. 高等養護学校への進学の際緯

表3は、高等養護学校進学を決定した動機を56年度調査の結果と比較してまとめたものである。前報でも明らかなように56年度調査の結果によれば3進路類型の合計では、(1)の「(中学部の)担任の進路指導にしたがいました。」という項目が高い割合(63.5%)を占めているということが特徴的傾向として指摘されている(後藤, 小笠原 1983)。これに対して、本調査では(1)の項目の割合が減

表3. 進学を決定した動機

( ) 内は%

調査項目	進路型	①高等養護学校在学		②高等養護学校→就職		③高等養護学校→施設入所		合 計	
		昭・56	昭・62	昭・56	昭・62	昭・56	昭・62	昭・56	昭・62
1) 担任の進路指導にしたがい ました	調査年度	9 (81.8)	4.5 (40.9)	5.5 (45.8)	8 (53.3)	2 (66.7)	7 (46.7)	16.5 (63.5)	19.5 (47.6)
2) 父母がいろいろな資料など を参考に決めました		1 (9.1)	5 (45.5)	4.5 (37.5)	5 (33.3)	1 (33.3)	6 (40.0)	6.5 (25.0)	16 (39.0)
3) その他		1 (9.1)	1.5 (13.6)	2 (16.7)	2 (13.3)	0	2 (13.3)	3 (11.5)	5.5 (13.4)

少し(47.6%)、(2)の「父母がいろいろな資料などを参考に決めました。」という項目の割合が増加(39.0%)している点が特徴的傾向として指摘される。このことは、以前は担任の進路指導の中で高等養護学校の選択が位置づく傾向が強かったのに対して、現在は父母が意識的に高等養護学校を選択する傾向が強くなってきていると見てよいであろう。つまり、このことは親の意識の中に、高等養護学校の存在が強く意識され、身近なものになっていることを意味しているといえよう。特に、この傾向は①「高等養護学校在学」の進路型の親の回答資料の中に顕著に表われている。表3を見ると①「高等養護学校在学」の進路型の場合、項目(1)「担任の意向重視」の割合が81.8%(昭・56)から40.9%(昭・62)に激減しているのに対して、項目(2)「親の意向重視」の割合が9.1%(昭・56)から45.5%(昭・62)へ増加している。このような「担任の意向重視」から「親の意向重視」への変化は、親の高等養護学校進学への強い意向もさることながら、進路指導を進めるにあたって親の意向をできるだけくみ入れようとする担任の指導姿勢が反映しているものとも考えられる。

表4は、高等養護学校進学を決定した時にどの程度子どもの希望を受け入れたかをきいた結果をまとめたものである。3つの進路類型の合計を見てみると、多少減少してはいるが、(2)の「いろいろな状況と子どもの希望とを半々に尊重しました。」という項目が高い割合を占めている。割合は少ないが(1)の「ほとんど子どもの希望を尊重しました。」という項目が増加傾向にあり、子どもの意向をくみ入れようとする親の姿勢が認められ今後の推移が注目される。

表4. 子どもの希望を受け入れた度合い

( ) 内は%

調査項目	進路型	①高等養護学校在学		②高等養護学校→就職		③高等養護学校→施設入所		合 計	
		昭・56	昭・62	昭・56	昭・62	昭・56	昭・62	昭・56	昭・62
1) ほとんど子どもの希望を尊 重しました	調査年度	0	3 (27.3)	1 (8.3)	3 (20.0)	0	1 (6.7)	1 (3.8)	7 (17.1)
2) いろいろな状況と子どもの希 望とを半々に尊重しました		9 (81.8)	7 (63.6)	7 (58.3)	10 (66.7)	2 (66.7)	7 (46.7)	18 (69.2)	24 (58.5)
3) ほとんどまわりの状況で判 断しました		2 (18.2)	1 (9.1)	4 (33.3)	2 (13.3)	1 (33.3)	7 (46.7)	7 (26.9)	10 (24.4)

表5は、子どもを高等養護学校に進学させてみてよかったかどうかをきいた結果をまとめたものである。3進路類型を通して56年度調査、本調査ともに(1)の「高等部への進学は、いろいろな面で本人にとってよかったように思います。」という項目の回答が多かった。この傾向は3つの進路型に共通したものとなっている。このことは、進路指導の適切さもさることながら、高等部進学のもつ

特殊教育における後期中等教育の現状と課題

意味を多くの親は肯定的に受けとめていると見てよいであろう。

表5. 進学に関する父母の気持ち

( )内は%

調査項目	進路型		①高等養護学校在学		②高等養護学校→就職		③高等養護学校→施設入所		合 計	
	調査年度		昭・56	昭・62	昭・56	昭・62	昭・56	昭・62	昭・56	昭・62
1) 高等部への進学は、いろいろな面で本人にとってよかったように思います	10 (90.9)	11 (100.0)	9 (75.0)	14 (93.3)	2 (66.7)	12 (80.0)	21 (80.8)	37 (90.2)		
2) もっと、別の方向に取り組ませる機会を与えるべきだったと思います	0	0	0	1 (6.7)	0	3 (20.0)	0	4 (9.8)		
3) 高等部進学がよかったかどうか特別、考えたことはありません	1 (9.1)	0	3 (25.0)	0	1 (33.3)	0	5 (19.2)	0		
4) その他	0	0	0	0	0	0	0	0		

2. これからの高等養護学校への期待

表6は、今の高等養護学校が今後どのようになってほしいかをきいた結果をまとめたものである。調査項目は56年度調査の自由記述の部分をもとにして作成したものである。ひとつだけ最もあてはまる項目を選んでもらったが、2つとか3つに○印が付いてきたものがあった。その場合は、前述したように1÷(○印の数)というように計算し、重みを調整している。表中の度数の部分の小数のかたちになっているのは、以上のような集計の仕方に関係している。回答数が少なく、一般化は難しいが、(8)の「これまでの指導の仕方を今後も続けてほしいと思います。」という項目の回答が高

表6. 子どもの通学している高等養護学校に対する親の気持ち

( )内は%

調査項目	進路型	①高等養護学校在学	②高等養護学校→就職	③高等養護学校→施設入所	合 計	
1) もっと先生がかわいがってくればよいと思います		0	0	0	0	
2) こまった時に気軽に相談できる先生がいてくれるとよいと思います		0.2 (1.8)	3.4 (22.7)	1.9 (12.7)	5.5 (13.4)	
3) もっと本人の高等部でのようすを家庭におしえてくれる学校になってほしいと思います		0.8 (7.3)	1.8 (12.0)	2.3 (15.3)	4.9 (12.0)	
4) 本人が学校で苦勞しているようすなどをもっと担任の先生がわかってほしいと思います		1.2 (10.9)	0.3 (2.0)	2.3 (15.3)	3.8 (9.3)	
5) もっと友だちがふえてくれればよいと思います		0	0.5 (3.3)	0.8 (5.3)	1.3 (3.2)	

6) 高等部での親睦を深めるような行事がたくさん計画されてほしいと思います	2.1 (19.1)	1.0 (6.7)	0.3 (2.0)	3.4 (8.3)
7) 子どもに関する親の希望やなやみをもっときいてくれる学校になってほしいと思います	0.5 (4.5)	1.6 (10.7)	2.3 (15.3)	4.4 (10.7)
8) これまでの指導の仕方を今後も続けてほしいと思います	5.0 (45.5)	5.1 (34.0)	3.6 (24.0)	13.6 (33.4)
9) 特別, 希望することはありません	1.0 (9.1)	0	1.0 (6.7)	2.0 (5.0)
10) その他	0	1.0 (6.7)	0.5 (3.3)	1.5 (3.7)

い割合 (33.4%) を示しており, 子どもが在学した高等養護学校の教育を肯定的にとらえていると見ることができる。ただし, 割合は少ないが, 項目(2), (3), (7)なども相対的に見て割合が大きく, 無視できない。「こまった時に気軽に相談できる先生がいてほしい」、「もっと本人の高等部でのようすを家庭におしえてほしい」、「子どもに関する親の希望やなやみを聞いてほしい」といった学校への要望は親の気持ちとして当然のことのように思われる。これに対して項目(1), (5)などはほとんど選択されない項目になっている。「もっと友だちがふえてほしい」という項目の意味を考える時, この数値の低さに考えさせられるものがあるが, 今後の検討課題としたい。

表7は, 高等養護学校の子後指導に関する希望についてきた結果をまとめたものである。全体として割合の多い項目は, (3)の「就職できない場合に何か指導してもらいたいと思います。」であった。この項目に対しては, 3つの進路型とも一樣に高い割合を示している。これはやはり卒業後の最大の目標は就職であり, そのための指導を卒業後も行ってほしいという父母の気持ちの表れであるといえよう。特に, この気持ちを③の「高等養護学校→施設入所」の進路型の卒業生の父母も同様にもっていることは無視できないもののように思われる。進路型別に回答の違いを見てみると①

表7. 高等養護学校の子後指導に関する希望

( )内は%

調査項目	進路型	①高等養護学校 在学	②高等養護学校 →就職	③高等養護学校 →施設入所	合 計
1) 卒業生と父兄全員が一同に会する機会がほしいと思います		5 (45.5)	7 (46.7)	4 (26.7)	16 (39.0)
2) 定期的な職場訪問や家庭訪問をしてほしいと思います		6 (54.5)	11 (73.3)	1 (6.7)	18 (43.9)
3) 就職できない場合に何か指導してもらいたいと思います		5 (45.5)	8 (53.3)	8 (53.3)	21 (51.2)
4) 卒業した皆さんの情報を教えてもらいたいと思います		2 (18.2)	6 (40.0)	5 (33.3)	13 (31.7)
5) その他		1 (9.1)	2 (13.3)	4 (26.7)	7 (17.1)

の「高等養護学校在学」の進路型の場合、(1)、(2)、(3)の項目にまんべんなく回答されており、まだ在学中のために予後指導に対する焦点が定まっていなように思われる。②の「高等養護学校→就職」の進路型の場合、現在就職しているために(2)の「定期的な職場訪問や家庭訪問をしてほしい」と思います。」の項目が73.3%と高い割合を占めている。就職をすると新しい環境になるので、あまり過去のことにとらわれないように思われるが、父母としては職場に訪問してもらい子どもに声をかけてくれたり、話をきいてくれたりするといろいろな面で安心なのかもしれない。③の進路型の場合、(3)の項目の回答が多い。現在は施設に入所しているが、なんらかのかたちで就職させたいという前向きな姿勢が感じられる。このように見てくると、一口に予後指導といっても現在の様子や進路の型により、子どもの抱えている課題や親の希望も異なっていることが指摘される。この点をふまえた指導の仕方を考えていくことが今後必要と思われる。

表8は、今後どのような高等養護学校が設けられるとよいと思っているかをきいたものである。この項目は、高等養護学校進学者だけではなく、F学級卒業生全員にきいている。全体としては、(3)の「卒業後の指導にも力をいれてくれる高等部が設けられればよいと思います。」という項目の割合が71.0%と高い割合を占めている。予後指導への親の希望は、高等養護学校進学者群(78.0%)において特に顕著である。また、(2)の「職場開拓が充実している高等部が設けられればよいと思います。」(51.6%)という項目と(6)の「職業訓練を中心とした高等部が設けられればよいと思います。」(50.0%)という項目の回答の割合が多い。このことは、子どもが将来、職業的に自立することが親にとって一番の望みであるということを示していると思われる。これに対して、高等養護学校非進学者群の内容をみると、(1)の「希望者全員が進学できる高等部が設けられればよいと思います。」(61.9%)の項目に特徴があるように思われる。これは高等養護学校非進学者群ということもあり、希望してもなかなか進学できないという現状を反映していると思われる。

表8. 高等養護学校の今後のあり方に関する親の意向

( )内は%

調査項目	調査対象群	高等養護学校 進学者群	高等養護学校 非進学者群	合計
1) 希望者全員が進学できる高等部が設けられればよいと思います。		17 (41.5)	13 (61.9)	30 (48.4)
2) 職場開拓が充実している高等部が設けられればよいと思います。		22 (53.7)	10 (47.6)	32 (51.6)
3) 卒業後の指導にも力をいれてくれる高等部が設けられればよいと思います。		32 (78.0)	12 (57.1)	44 (71.0)
4) 教科学習を中心とした高等部が設けられればよいと思います。		0	2 (9.5)	2 (3.2)
5) 機能訓練や体力作りを中心とした高等部が設けられればよいと思います。		15 (36.6)	6 (28.6)	21 (33.9)
6) 職業訓練を中心とした高等部が設けられればよいと思います。		22 (53.7)	9 (42.9)	31 (50.0)
7) 個別指導を重視した指導を進める高等部が設けられればよいと思います。		15 (36.6)	8 (38.1)	23 (37.1)
8) その他		4 (9.8)	0	4 (6.5)

総体的に見てこれからの高等養護学校に対する親のイメージは、どちらかと言えば子どもの職業的自立をめざした、いわゆる社会自立型の高等養護学校を描いているように見える。この傾向は非進学者群の親にも同様の傾向として認められており、進学者群の親と同様、子どもの「社会的自立」という目標に向かって軌を一にしている。その上立って、希望者全員が進学できる高等養護学校を求めているように思われる。資料を分析した限りにおいては、いわゆる生活重視型の高等養護学校を志向する傾向は認めづらい。このことは、今回の調査対象が特殊学級中学部卒業生という範囲に限られていたことも大きく関係しているように思われる。今後この点にも留意した掘り下げが必要と思われる。

### 3. 子どもの将来について

表9は、子どもの将来をどのように考えているかについての設問項目に対する回答結果をまとめたものである。ここでも就職に対する強い希望が認められており、(1)の「できることなら技術を身につけさせて生活に困らないようにさせたいと考えています。」の項目が51.2%(進学者群)、57.1%(非進学者群)になっている。これに対して、項目(2)の「できれば本人にあった施設に入所させたいと考えています。」の割合は19.5%(進学者群)、28.6%(非進学者群)にとどまっており、項目(1)と対照的な関係になっている。割合は少ないが項目(3)のように結婚のことも親は考えており、特

表9. 子どもの将来についての親の考え

( )内は%

調査項目	調査対象群	高等養護学校 進学者群	高等養護学校 非進学者群	合 計
1) できることなら技術を身につけさせて生活に こまらないようにさせたいと考えています		21 (51.2)	12 (57.1)	33 (53.2)
2) できれば、本人にあった施設に入所させたい と考えています		8 (19.5)	6 (28.6)	14 (22.6)
3) 結婚させたいと考えています		10 (24.4)	2 (9.5)	12 (19.4)
4) できるだけ親のそばで生活できるようにさせ たいと考えています		12 (29.3)	8 (38.1)	20 (32.3)
5) 今のところ、特別考えていません		3 (7.3)	2 (9.5)	5 (8.1)
6) その他		5 (12.2)	5 (23.8)	10 (16.1)

に、進学者群の親にその傾向が認められる。総じてこれらの資料を見ると、進学者群、非進学者群の親のいずれもが社会的自立の方向にそって子どもの将来を考えていると見てよいであろう。これらの親の考えは、単に親の考えだけにとどまらず、福祉や行政にかかわる者にとっても、十分考慮すべき重要な観点を内包しているように思われる。

### 4. まとめにあたって

以上、高等養護学校に焦点をあてて検討してきたが、これまでの資料の分析から明らかなように、高等養護学校の現状を考えると、親にとって近年ますます関心の対象となっており、身近な存在として捉えられていることが明らかにされたように思われる。多くの親は、子どもを高等養護学校に

進学させてよかったと感じていることも明らかにされた。しかし、さらによりよい高等養護学校に対するイメージについては、十分浮かびあがっていないのが実状のようである。それにしても、「希望者全員が入学できる高等部を」という要望や「職業訓練・職場開拓の充実した高等部を」といった要望などは、今後の高等養護学校作りにとって無視できぬ主要な観点となろう。さらに、「卒業後の指導にも力を入れてくれる高等部を」といった予後指導に対する強い要望は、これまでの「高等部」のあり方に強い警告を与えるものと受けとめることもできよう。卒業後も密接なかかわりをもつ、いわばフォロースルーのある指導のあり方を親が求めていることに留意することが大切である。

高等養護学校もしくは高等部設置への要望は、今後ますます強まるものと思われる。特に、養護学校高等部の設置は、障害をもつ子どもにとって重要と思われる一貫性のある教育を進める上で重要な条件となるように思われる。障害をもつ子どもの場合、順序性のあるきめの細かい指導が必要とされている。また、長期的見通しに立った指導計画の中で教育を進めることが、これら障害をもつ子どもにとって好ましい結果をもたらす場合が多い。高等部の設置は、教育期間に幅をもたせることが可能となり、社会自立に向けて十分な基礎作りの時間が確保されるという点で大きな意味をもつように思われる。今回の調査では、いわゆる生活重視型の高等部の要望は浮かんではないが、障害の重い子どもほど場の変化に影響をうけやすい。場に慣れ、自分の力を十分発揮するまでには時間を要する子どもが多い。なじみの場で、なじみの指導パターンで十分時間をかけて指導を進めることがなによりも大切である。その意味では、分離型の高等養護学校では好ましい学習効果をうまない子ども達もいることを留意した設置計画が求められよう。いづれにしても、長期の見通しに立った指導計画を立案し、一貫性のある教育を実践するためには、安定した教育指導体制がまずもって必要である。高等部の組み入れは、今後の障害児教育の変容にせまる、大きな要因として注目される。

## あとがき

本調査研究は前報にひき続き、後藤が研究の全体計画を立案し、小笠原詠子が調査の実施と資料の分析、および執筆を担当した。しかし、本稿をまとめるにあたってはお互いに十分な討議を加えており、両者の意見が一致したことがらに基づいて考察が加えられている。特殊教育における後期中等教育のあり方を検討する上での素材に利用されれば幸いである。

## 引用文献

- (1) 特殊教育百年北海道記念会：北海道の特殊教育。1978。
- (2) 北海道教育委員会：北海道の特殊教育，1972～1987年度版（パンフレット）。
- (3) 後藤 守・小笠原詠子：精神遅滞児における特殊学級卒業後の動向（I）。北海道教育大学紀要（第一部C）第33巻第2号，1983。

## 参考文献

- (1) 飯田貞雄：予後指導——就職者の追指導を中心として。精神薄弱児研究，130。1969。
- (2) 西脇佑五郎：中学校特殊学級卒業生の動向。精神薄弱児研究，65。1964。
- (3) 広瀬恭子：特殊学級卒業者の予後調査。特殊教育学研究第12巻第3号，1975。
- (4) 北海道特殊学校長会教育課程委員会：北海道特殊教育諸学校卒業生の進路追跡調査について。

後藤 守・小笠原 詠子

北海道特殊学校長会研究集録, 1983.

(後藤 守・本学教授 札幌分校 小笠原詠子・本学非常勤講師 札幌分校)